

江別市長 殿

酪農学園大学
動物愛護フェスティバル in えべつ実行委員会
研究代表 中村 達朗

令和 7 年度 江別市大学連携調査事業 成果報告書
飼い主がもつ車中泊避難への意識調査

背景

平成 28 年に起きた熊本地震の調査から、約 70%の人が車中を避難場所として選択し、その約 15%はペットがいたことが理由であったことが示されている (1)。車中泊はエコノミー症候群などの震災関連死との関連が強く、市町村等では推奨していない (2)。しかしながら、現実問題として車中泊避難を選択する市民は多く、動物を飼育する家庭の場合はそれを選択する可能性高くなることが想像される。

我々は令和 6 年度に酪農学園大学キャンパス内で開催した動物愛護フェスティバル in えべつ（愛護フェス）2024 にて「飼い主がもつ車中泊避難への意識調査」を実施した。その結果、動物を飼育する来場者の 73%が車中泊避難を選択すると回答し、江別市民のみを対象に集計しても 71%が車中泊避難を選択すると回答していた。したがって、動物を飼育する家庭が車中泊を選択する可能性は、少なくとも令和 6 年度の時点では、極めて高いことがわかる。

一方で、車中泊避難を選択する江別市の飼い主のうち 69%が「避難場所は未だ決めていないが同伴避難場所があれば利用する」と回答した。これは車中泊避難が可能な場所を把握していないことを示している。熊本地震では公園やショッピングモールが車中泊避難場所として実際に使われた。江別市にはそれらの施設が比較的多くあり、車中泊避難先として利用される可能性は高い。

今後、江別市が実際に大規模な災害に見舞われた際、効果的な防災対策を講じるためには、市民から求められる避難場所の数や広さ、設備を把握することが重要である。また、車中泊避難を選択するであろう家庭の避難先とその数などを把握し、事前準備を行う必要がある。

目的

本調査研究は、令和 6 年度に引き続き、飼い主の車中泊避難への意識の継続調査を行い、江別市が災害時に備えて準備すべき課題を明らかにするための情報収集を目的として行った。

方法

令和 6 年 9 月 21 日に酪農学園大学がキャンパス内で開催された動物愛護フェスティバル in えべつに来場したペットの飼い主を対象に、飼い主が想定する避難先と車中泊避難、更に準備体制に関するアンケート調査を行った。アンケートは、個人情報that特定できない無記名の選択式・記述式問題への回答にて行った（資料 1）。調査結果は、単純集計にて各回答に対する人数と割合を算出した。

結果

アンケート調査では各家庭の代表者 1 名に回答頂いたことから、以下の結果では単位を「名」としている。しかし、「名」を「家庭」と読み変えても結果が大きく異なることにはならないと考えられる。

1. 回答者の属性

本研究では 509 名の回答を得た。飼い主の意識調査という目的に従い、動物を飼育していないと回答した 25 名は除外し、484 名の回答で集計した。

2. 回答者の居住地

図 1 に回答者の居住地を示した。左は令和 6 年度の結果を、右に令和 7 年度の本研究結果を示した（図 1）。回答者 484 名のうち江別市民は 150 名（31%）、227 名（47%）が札幌市民、その他の地域が 103 名（22%）、無回答が 4 名（1%）であった。令和 6 年度と比較してその人数と構成比はほぼ同等であった。以降、「江別市民」からの回答を中心に列記していく。

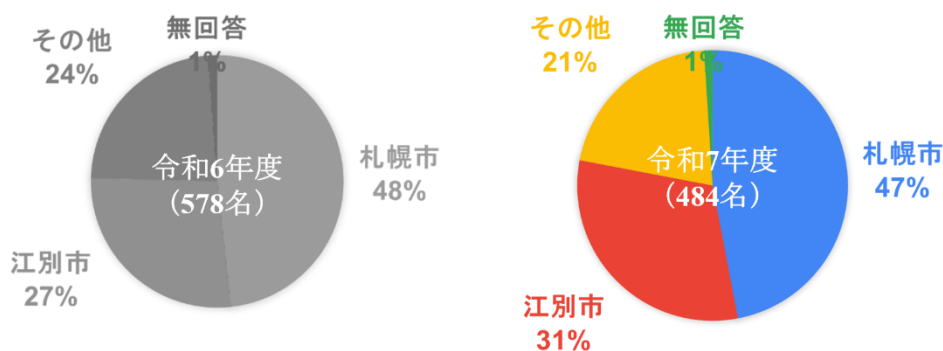


図1 回答者の居住地

2. 車中泊の選択

図 2 の右のグラフに示すように、動物を飼育する江別市民（150 名）のうち、127 名（85%）が車中泊を選択すると回答した。それ以外の 20 名（13%）は、選択しないと回答し、4 名（3%）が無回答であった。令和 6 年度の調査と比較して車中泊避難を選択する江別市民の割合が 71%から 85%に上昇した。

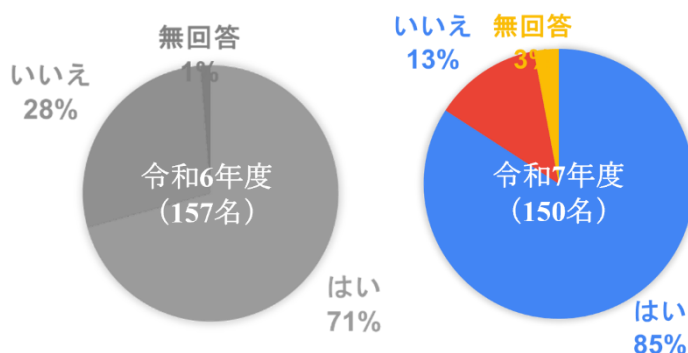


図2 来場した江別市民の車中泊避難への意識

動物を飼育する札幌市民 227 名のうち、189 名（83%）が車中泊避難を選択すると回答した。16 名（37%）が選択しないと回答し、1 名（0.4%）が無回答であった。加えて、動物を飼育する江別市、札幌市、それ以外の都市に住むすべての回答者 484 名においては、412 名（85%）が車中泊を選択する、67 名（14%）が選択しないと回答し、5 名（1%）が無回答であった。令和 7 年度の調査において車中泊避難を選択すると回答した割合は江別市民（8%）のみならず、札幌市民では 7%、さらには、全回答の集計では 12%、令和 6 年度と比較して上昇していた（札幌市民 7%、全回答者 12%）。

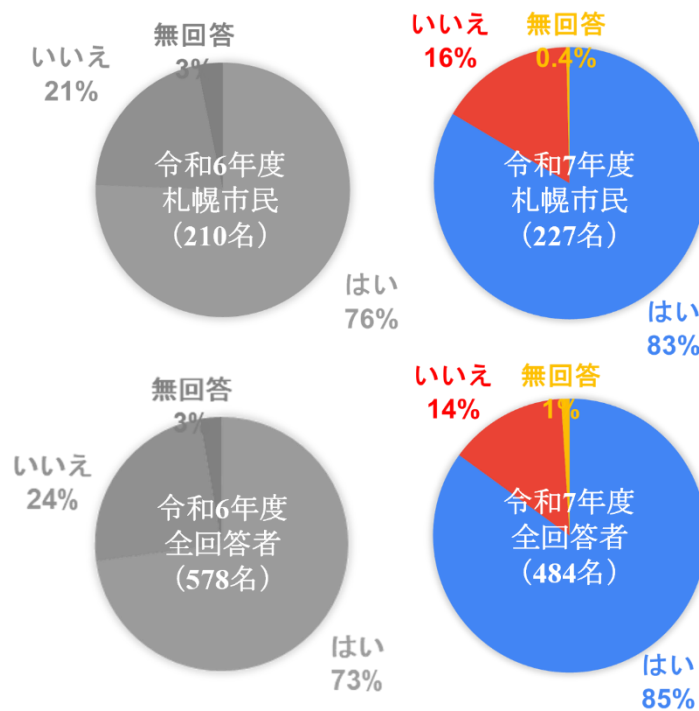


図3 来場した札幌市民および全回答者の車中泊避難への意識

3. 車中泊を選択すると回答した江別市民の属性

3-1 車中泊避難場所

車中泊を選択する江別市民のうち、避難場所を既に決めていると回答したのは 24 名（19%）、決めていないのは 96 名（75%）、無回答が 7 名（6%）であった（図 3a）。令和 6 年度と比較して、決めている市民の割合は 4%上昇したが、決めていない市民の割合も 6%上昇した。

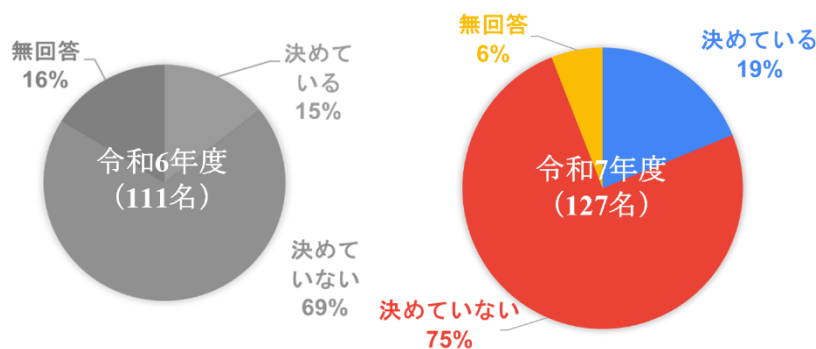


図4 車中泊避難所への意識

3-2 避難人数

図 5 に示すように、車中泊避難をすると回答した家庭では、1 家庭につき 2 人～4 人の人間が避難する割合が 81%を占めており、平均 2.9 ± 1.2 人が避難すると算出された。令和 6 年度の 2.4 人と比較してやや上昇した。

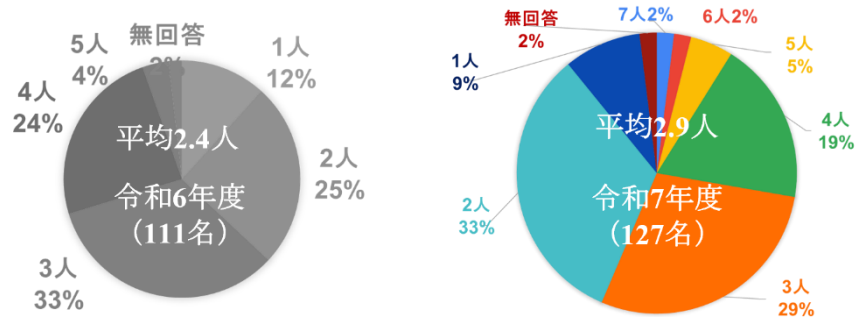


図5 車中泊避難する人間の数

3-3 車種

図6に示すように、車中泊避難をすると回答した127家庭がもつ車種では、軽（44家庭、35%）をもつ家庭が最多であった。軽・コンパクトカー（12家庭、9%）・セダン（5家庭、4%）などの比較的小さい車をもつ家庭（計48%）と、SUV（23家庭、18%）・ミニバン（21家庭、17%）・ワゴン（12家庭、9%）などの比較的大きい車をもつ家庭（計44%）は、同程度であった。

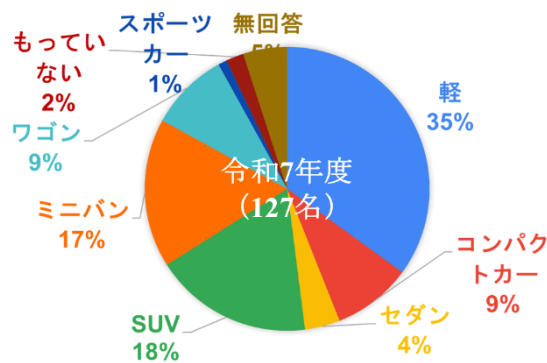


図6 車中泊避難する家庭の車種

3-4 動物種

表1に示すように、同伴で車中泊避難する動物種は、イヌのみと回答した家庭が8割を占めた。ネコのみは3%、イヌとネコは13%、その他（ウサギやウシ、インコなど）の動物種と回答した家庭は4%であった。

表1 共に車中泊避難する動物の種類とその家庭数

動物の種類	イヌのみ	ネコのみ	イヌとネコ	その他
家庭数	104 (82%)	4 (3%)	13 (10%)	4 (3%)

車中泊避難する動物種として最多であったイヌの頭数を集計したところ、4頭と回答したのは1名(1%)、3頭が3名(3%)、2頭が26名(22%)で、1頭が88名(74%)であった。車中泊避難する家庭1つに対して平均1.3頭のイヌが避難すると算出された(図6)。

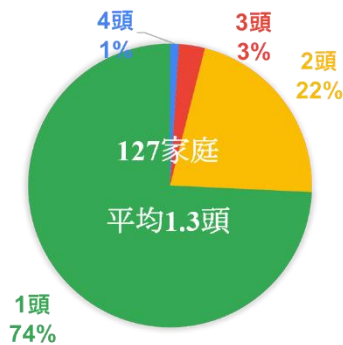


図7 車中泊避難する1家庭あたりのイヌの頭数

3-5 車中泊避難をする理由

自由記述にて車中泊避難をするの理由を調査したところ、127名のうち96名からの回答があった。そのうち80名（83%）が回答した「動物がいるから」という理由が大多数を占めた。その他、「自由度が高い」や「近くに避難所がない」などの回答もあった。

3-6 車中泊避難場所を決めていない理由

車中泊避難をするが避難場所を決めていないと回答した96名の「決めていない理由」を調査した。96名のうち50名から回答があった。「まだ考えていない・調べていない」の回答が最も多かった（20名、40%）。次いで、「避難場所がわからない」が16名（32%）、「災害時にしかわらかない」が11名（22%）であった。

また、避難場所を決めていない96名のうち、江別市の車中泊避難者の一時的な避難場所として提供されている「ダイナム江別店の駐車場の一部」があることを知っていたのは2名（2%）であり、93名（97%）が知らないと回答した。

さらに、避難場所を決めていない96名のうち、「酪農学園大学内に車中泊避難場所が設置された場合、利用しますか」に対して、88名（92%）が利用すると回答し、7名（7%）が利用しないと回答した。

表2 車中泊避難をするが避難場所を決めていない江別市民を対象にした各調査結果

避難場所を決めていない理由			ダイナム江別店		酪農大	
調べていない	場所が不明	災害時に決める	知っている	知らない	利用する	利用しない
20 (40%)	16 (32%)	11 (22%)	2 (2%)	93 (97%)	88 (92%)	7 (7%)
回答者 50 名			回答者 95 名		回答者 95 名	

3-7. 車中泊避難をするために準備をしていること

自由記述にて車中泊避難に向けた準備の有無を集計した。車中泊を選択すると回答した127名のうち、76名（60%）が何らかの準備（しつけや避難グッズ）をしていると回答した。一方、21名（17%）は準備をしていないと回答し、51名（40%）が無回答であった。

4. 江別市に求める「ペットとの避難」に求める情報

最後に、車中泊を選択する回答した江別市民が江別市に求める情報を集計した。127名のうち69名（54%）が無回答、8名（6%）が「特に無し」、10名（8%）が情報ではなく「要望」を回答した。これらの合計87を除外した40名分の回答を集計した。その結果、33名（82%）が「同伴避難が可能な場所」を求める情報と回した。また、具体的にその情報をLINEで発信してほしいなどの意見もあった。

また、参考までに回答された「要望」には、「同伴場所の増設」や「ペットを行う避難訓練の実施」など

があった。

まとめ

本研究では、動物（主にイヌ）の飼い主が約 5000 人集まるイベントである動物愛護フェス 2025 にて、車中泊避難の選択とそれに対する準備についての継続調査を実施した。その結果、

- 1) 動物を飼育する江別市民のうち約 85%の飼い主が、平均 2.9 人の人間と動物で車中泊避難を選択する可能性がある。また、令和 6 年度の調査結果と比較して、選択する飼い主の割合が 14%、避難する人間の数が 0.5 人、増加した。
- 2) 車中泊を選択する理由の 83%が「動物を飼育しているから」であった。
- 3) 車中泊を選択すると回答した人のうち 75%が避難場所を決めておらず、その理由に「まだ考えていない」「場所がわからない」「災害時にならないとわからない」があった。
- 4) 車中泊避難を選択するが避難場所を決めていないと回答した人のうち 97%は、江別市が提供する一時車中泊避難場所を把握していなかった。また、仮に酪農学園大学が提供先となった場合は、92%が利用すると回答した。
- 5) 同伴避難が可能な場所の情報を求める意見が一定数あった。
ことが明らかとなった。

令和 6 年度（昨年度）から引き続いて実施した令和 7 年度（今年度）の調査結果から、動物を飼育している江別市民が災害時の避難先として車中を選択する可能性は依然として高いこと予想される。今年度の調査ではその理由を自由記述にて調査し、80%以上（75%の回答率）が「動物を飼育しているから」と回答した。したがって、動物を飼育している家庭は「動物を飼育しているから」という理由で災害時の避難先として車中を選択する確率が非常に高いことが予想される。

今年度の調査では、回答者数に大きな違いはないものの、車中泊避難を選択する飼い主の割合が昨年度と比較して増加した。イベントの当日は昨年度と異なり悪天候（強風と少雨）であったため、来場者のほとんどが徒歩ではなく車で来場したと考えられる。回答者のほとんどが車をもつ市民であったために車中泊を選択する割合が増加したのかもしれないが、その理由は不明である。

昨年度から変わらず、車中泊を選択すると回答した多くの飼い主が避難場所を決めていないと回答した。この理由として、「調べていない・災害時に決める」といった「そもそもまだ考えていないから」が多くを占めた。現実的に明日災害が起こると想定することは難しいが、日常的な備えを促す情報の発信が必要なのかもしれない。また、「場所がわからないから」という回答も一定数あった。江別市は車中泊の一時避難場所としてダイナム江別店の駐車場の一部を提供するとしているが、このことを把握している市民も、昨年に引き続き非常に少なかった。熊本地震では大型の都市公園や大型商業施設の駐車場で車中泊避難が行われたことから（2）、実際に災害が起こった場合、江別市でも同様に、大型商業施設の駐車場や公園の駐車場などが使用される可能性が高い。今回の調査でも、「酪農学園大学内に動物とその飼い主だけが利用できる避難所があったら、利用するか」という質問への回答も求めており、これに対して、9 割以上の市民が「利用する」と回答した。すなわち、避難所を把握していればその場所を利用する可能性がある。

本研究は、「イヌを連れて楽しむことができる」イベント内で実施したアンケート調査の結果に基づいている。そのため回答者が飼育する動物種が「イヌのみ」である割合が非常に高かったと考えられる。ネコなどのその他の動物種を飼育する飼い主が災害時の避難先に車中泊を選択するか否かはわからない。様々な動物種を飼育する飼い主を対象にした調査や動物を飼育しない市民を対象とした調査を実施することでより正確な江別市における車中泊避難選択の可能性を知ることにつながる。

回答者が江別市に望む情報のほとんどが「避難場所」であった。ホームページ等でも既に発信はされてい

るが、各家庭に行き届いていない実態も一方ではあると思われる。発信の媒体（LINE など）の種類や頻度を増やす必要があるのかもしれない。

今年度の調査により車中泊避難を選択すると回答した市民の割合が大きく増加した結果が得られたことから、飼い主の意識の変化を毎年追跡して年ごとに情報を充進する必要があることが明らかになった。また、避難場所の提示とその必要性についての啓蒙法について課題があることも明らかになった。本成果は、災害前の啓蒙内容や災害後の支援量、車中泊避難ガイドブック作成への参考となりえるものとする。災害に強いまち江別市づくりに貢献できれば幸いである。

謝辞

動物愛護フェスティバル in えべつ 2025 にご来場され本調査にご協力頂きました皆様に深く感謝致します。

引用資料

1. 避難生活の環境変化に対応した支援の実施に関する検討会.”資料 7 平成 28 年熊本地震における車中泊の状況について”（第 7 回）令和 6 年 4 月 23 日、内閣府 .
<https://www.bousai.go.jp/kaigirep/kentokai/hinanseikatsu/07/pdf/shiryo1.pdf>
2. 避難生活の環境変化に対応した支援の実施に関する検討会.”資料 1 車中泊避難者の支援について”（第 4 回）令和 5 年 10 月 25 日、内閣府 <https://www.bousai.go.jp/kaigirep/kentokai/hinanseikatsu/04/pdf/shiryo1.pdf>

参考資料

1. 犬防災編集部編「犬と一緒に生き残る防災 BOOK：決定版」日東書院、2021.
2. 猫びより編集部編「猫と一緒に生き残る防災 BOOK：決定版」日東書院、2018.
3. 鳥防災編集部編「鳥と一緒に生き残る防災 BOOK：決定版」日東書院、2023.
4. 神林博史、三輪哲「社会調査のための統計学」技術評論社、2011.
5. サニーカミヤ 「ペットの命を守る本」緑書房、2021